

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17390572

研究課題名（和文） 看護学でのサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型
カリキュラム開発と評価研究課題名（英文） Development and Evaluation of an e-Learning Program using
Service-Learning in Nursing

研究代表者

田代 順子（TASHIRO JUNKO）

聖路加看護大学 看護学部・教授

研究者番号：30134175

研究成果の概要：平成 17・18 年に、学生ボランティア用 Web 学習プログラムを、学生と協働して、作成した。平成 19 年には、試用し、平成 20 年にボランティア学生用サイトの学生のログ（活動日誌）や、活用に関する学生の意見、関わった教員の意見から評価した。ボランティア学習一般サイトは、現在も、毎月 500～600 のアクセスがあり、使用されている。ボランティア学生用サイトでの活動記録は、web での学習方法は馴染みが薄く、多くの学生の使用には至らなかったが、試用した学生は多くの学びを報告していた。教員の学習支援は、学生へのガイダンスや学習中の支援に関しては、更なる方策が必要であると評価された。今後、Web ベースのサービス・ラーニング科目として改善する。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	10,200,000	0	10,200,000
2006 年度	3,200,000	0	3,200,000
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総計	15,700,000	690,000	16,390,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：サービス・ラーニング、看護大学生、ヘルス・ボランティア、カリキュラム、社会参加、e-ラーニング、看護学

1. 研究開始当初の背景

日本においてボランティア活動は活発となり、ボランティア活動を教育に取り入れている大学は増えている（佐々木、2003）。研究者らの教育機関も、看護大学の特色が、保健・医療関連のボランティアをしている学生は少なくない。

研究者らは、平成 14 - 16 年度に学生が地域・社会で行なっているボランティア活動の教育ニーズを調査し（香春、2005）学生を支援するために学習プログラム指針を作成

した。

2. 研究の目的

1)平成 17 年から学生 1～2 年生のボランティア活動の学習ニーズに基づいて開発した学習指針に沿って、ボランティア知識とサービス・ラーニングの要素をいれた活動からの学びを支援する e-ラーニングプログラムを開発すること、2)開発した e-ラーニングプログラムを、ボランティア学生の体験の記述と「振り返り（reflection）」のログから学習状況と教員の学習支援活動の視点から評価すること、3)これらの評価に基づいて、

サービス・ラーニングの科目としてシラバス概要を作成すること、であった。

3. 研究の方法

1) Web ベースの学習プログラム開発は、2段階のサイトを、ボランティア学生参加で作成した。(1)一般サイト上に、ボランティアについての理解のための学習コンテンツを、研究分担者、ソフト開発会社担当者とボランティア学生と協働して作成した。(2)ボランティア学生サイトは、登録制にして、将来、学生のボランティア活動から学ぶサービス・ラーニングとして公的なカリキュラムとできるよう作成した。

2)プログラム評価は、Web の活用状況と学生 Web の活動ノート及び活動まとめの記録の内容分析により評価した。加えて、サイト試用した学生と試用しなかった学生に面接調査に協力してもらいその調査の内容分析で評価した。

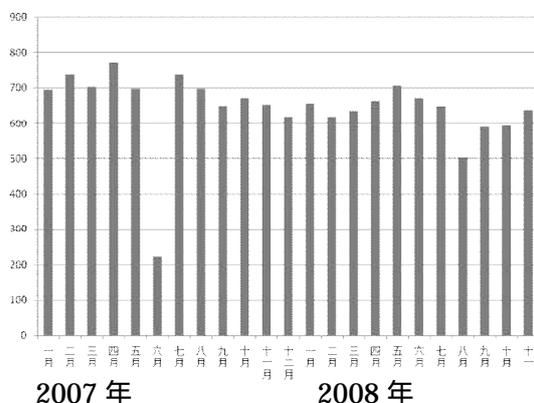
3)教員の Web 学習支援の評価に関して、Web を通しての学生への教育的関わりの評価に関してグループ面接をし、内容分析した。

4)Web 上サービス・ラーニング科目を作成するため、評価結果を基に、シラバス概要試案を作成した。

4. 研究成果 (評価結果)

1)一般ヘルス・ボランティア学習サイトの利用は、開始した2007年1月から2008年11月までの1年間で、14,768のアクセスを数え、各月のアクセス数は図2に示す通りで、初年度よりアクセス数は減少しているが2年目も600件前後アクセスされていた。

図2 一般サイトのアクセス数



2)ボランティア活動記録(ログ)の活用状況は、1年間のボランティア活動について学生 Web は122人中9名が活用し、延べ30件のログの提出があり、平均、3回ログを提出していた。ボランティアの場は、成人病棟(4

名、15回)、小児病棟(4名、5回)、障害児保育(2名、2回)、在宅ケア(1名、6回)、でボランティア活動をしていた。また、小児病棟ボランティアグループとして地域の他施設(2回)でボランティアに参加していた。また、地域での学習障害児へのボランティア活動も1件あった。

活動内容は、ボランティアの場により異なっていた。成人病棟では、夕食前後の時間であるため、配膳・下膳・その記録の入力、患者との談話であった。小児病棟では、遊び相手/フレンドとしてボランティアしていた。在宅ケアでは、24時間ケアの必要なケアであるため、呼吸管理、排泄、体位交換、清潔ケアを家族とともに進めていた。地域の障害児の保育、学習障害児のリレーションプログラムでは、遊びをしながら子どもとの関わりを持っていた。

ログの『感じた・考えたこと』の欄には、対人関係でのコミュニケーションや他者理解、そこで行う看護技術がある場合には、そのタイミングなど実践に関わる学びが報告されていた。『困ったこと』では、患者理解や、患者、家族、そして病棟ナースとの関わりはこれでよかったのかとの疑問が出されていた。

『今後の活動』欄には、積極的に今後やりたいことが述べられていた。

3)ログの試用した学生と試用しなかった学生の評価をまとめると5点に集約できた。

(1)自主的ボランティア活動では、グループ内のコミュニケーションが携帯電話やミーティング行い、義務ではないため記録作成はしていないし、記録をする発想もない。(2)記録のためにPC上のログサイトを使うには時間とエネルギーが必要である。(3)Web上で、他の学生の経験を参考にしたいが現在のWebでは他学生の経験の共有はできない。(4)デジタルに馴染んでいない。(5)コメントをもらう教員がわからないし、貰い難い、等であった。

3)研究者教員の学習支援活動の評価:

(1)教員の学習支援経験:教員の学習支援は、関わった教員と関わらなかった教員がいた。その理由は、学習Webサイトは、学生にとって馴染みのない学習資源で、使ってもらうには試行錯誤の時間のかかる活動が必要で、数名の教員のみがWebの管理と学生支援に関わることになったと報告していた。Webが完成後、半数の教員は学習支援には関わることがなくなってしまうと語った。ボランティア学生が常に関わる教員は、Web上での質問に答える「期間がきまっていなかった」ので、Webでの質問がメールで送られてきても、学外実習の時には、回答の返信が遅れることもあったと報告した。学生と協働でプログラム開発できたことは、肯定的であったが、

その後の e-学習支援は、時間の調整をすることが困難であったと報告していた。

4) Web 基盤のサービス・ラーニング科目概要の作成、

ボランティア活動から学生が多くの学びをしている成果から、この科目の目標を、教養課程(1・2年生)にある看護学生が、キャンパスを出て地域社会でボランティア活動を通じて地域社会の人々の生活と自らも社会の一員(市民)としての責任を学ぶこととした。ヘルス・ボランティアは、対人関係やコミュニケーションに基づいて行われることであり、自己内の振り返り、Web 上でのコミュニケーション、加えて、その学びを履修する学生・教員間での共有化とさらなる学びは重要であると考え、Web 上学習と対面学習を組合わせた科目として作成した。

5) 終わりに

平成 14(2002)年から、看護学生がヘルス・ボランティアとしての活動からの学びを支援するプログラムをボランティア学生の学習ニーズに基づいて指針を作成した。平成 17(2005)年からは、さらに、Web 上での学習支援プログラムとして試用し・評価した。この評価に基づいて、平成 21(2009)年度から科目として開講する。高等教育機関として、学生が、教養課程のこの選択科目を履修することによって、ボランティア活動を通じて地域の人々とその生活の理解を深め、さらに、看護学を専門的に学習する基盤できることを期待する。またキャンパスを出て、遠隔での個別の学びを支援する科目として教員は Web ベースの学習支援実践と評価を重ねて新たな教育方法を発展させる計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

田代順子、長松康子、松谷美和子、菱沼典子、及川郁子、平林優子、麻原きよみ、大森純子、佐居由美、(2009)Web 上でのヘルス・ボランティア学習支援プログラム試用の評価・改善とカリキュラム化、聖路加看護学会誌、13 巻、投稿中

田代順子、長松康子、大森純子、菱沼典子、松谷美和子、及川郁子、麻原きよみ、平林優子、酒井昌子 (2007).Web 上でのヘルス・ボランティア学習とボランティア学生学習支援プログラム開発：ヘルス・ボランティア・e-センター開発過程。聖路加看護学会誌、11 巻 1 号、109-115.

長松康子、田代順子、菱沼典子、松谷美和子、及川郁子、麻原きよみ、平林優子、大森

純子、(2007).海外ボランティアを行なう看護学生向けサービスラーニングカリキュラムに必要な情報と支援策 タイのコミュニティーにおけるボランティア活動を通じた学生体験評価。聖路加看護学会誌、11 巻 1 号、68-73.

田代順子、大森純子、松谷美和子、菱沼典子、及川郁子、麻原きよみ、平林優子、(2007).米国におけるサービスラーニング(地域参加型教育)の理念と取り組み 視察調査とワークショップを通して。聖路加看護大学紀要、33 号、68-73.

[学会発表](計 3 件)

田代順子、長松康子、平林優子、松谷美和子、菱沼典子、及川郁子、麻原きよみ、大森純子。ボランティア学生の Web 上記録への評価と記録様式の改善。第 28 回日本看護科学学会。2008 年 12 月 13 日、福岡

Tashiro, J., Hishinuma, M., Matsutani, M., Oikawa, I., Asahara, K., Hirabayashi, Y., Omori, J., (2007). Development of Service-Learning Program Using E-Learning for Nursing Students Health Volunteers. ICN conference, Yokohama, June 1, 2007.

大森純子、田代順子、麻原きよみ、平林優子、及川郁子、松谷美和子、菱沼典子、香春知永、酒井昌子、米国におけるサービスラーニングの取り組みの比較検討。第 11 回聖路加看護学会、2006 年 9 月 23 日、東京

[その他]

ホームページ

<http://www.lukavo.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田代 順子 (TASHIRO JUNKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：30134175

(2) 研究分担者

松谷 美和子 (MATSUTANI MIWAKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60103587

(3) 連携研究者

菱沼 典子 (HISHINUMA MICHIKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40103585

及川 郁子 (OIKAWA IKUKO)

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：90185174

麻原 きよみ (ASAHARA KIYOMI)

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：80240795

平林 優子 (HIRABAYASHI YUKO)

聖路加看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：50228813

大森 純子 (OMORI JUNKO)

聖路加看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：50295391

長松 康子 (NAGAMATSU YASUKO)

聖路加看護大学・看護学部・助教

研究者番号：80286707

佐居 由美 (SAKYO YUMI)

聖路加看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：10297070